価値の論証について

大　木　啓　次

ま　え　が　き

本稿は，『資本論』頭章における価値の論証の仕方について検討する。そして，労働価値説の理解に役だつことを目的とする。

『資本論』頭章にみられる，いわゆる使用価値の捨象についての叙述にかんれんして，筆者の敬慕してやまない久留間鮫造氏は，かつて，つぎのようにのべられている。

「あすこのところが誤解の種になっているということは事実でしょう。しかしあれ以外にどういうやり方があるのか。マルクスは商品を分析してああいう結果に到達しているのですが，商品の分析から出発するということは，さきに問題にした『資本論』の冒頭の文句によってわかるように，マルクスにとっては非常に重大な意味をもったかけがえのないことなのですから，これはどうにも動かしようがない。それを否定することは経済学批判の方法に関する彼の根本的な考え方を否定することになる。またあすこの価値の実体まで分析を進めているのを途中でやめても大変なことになる。価値の実体が明らかにされず労働の二重性が明かにされないなら価値形態も明らかにされず貨幣の必然性も明かにされないことになる。もし改善の余地があるとすれば，あの分析して行く際の証明の仕方に止ると思うが……°」[1)]

筆者は，まえに，つぎのように書いたことがある。

『資本論』の初版と現行版とを比較するとき，「価値が誘導されるまでの部分についていえば，そのいちいちについて見てきたごとく，『資本論』の初版および現行版での考えは基本的に一致している。相違は，ほとんどが論証のしかた，説明のしかたでの相違である。説明のしかたの相違を用語のうえでもっとも特徴的にしめしているものは，交換価値概念の用法であった。そしてその叙述は，いくたの点で，初版から現行版へと改善されている。交換価値と価値との区別および関連についていえば，その叙述は現行版のほうがより確然として明示的であるといえよう。だがしかし，価値の誘導へいたるまでのすべての叙述のしかたが，現行版においては初版におけるよりもすぐれているといちがいに断定できないのではなかろうか。すなわち，

1）向坂逸郎，宇野弘蔵編『資本論研究』至誠堂刊，90～91頁。

たとえば，現行版では，使用価値の捨象をとおして，まず抽象的人間労働を発見している。そしてそのさい，抽象的人間労働は互いに区別されえない同等な人間労働であると説明されている。だが，抽象的人間労働が社会的なものであることは，むしろ，その後につづく価値の規定にさいして，よりはっきりとおこなわれている。これにたいし，初版では，価値の社会的実体の規定にあたって，「諸商品の価値存在は……それらの統一体を形成する。この統一体が生れるのは自然からではなくて社会からである」と，簡潔に――おそらく意識的に簡潔に――ではあるが直截に説明をくわえている。これらの両者を比較するとき，説明法として，初版における説明のほうがより説得的であるばあいもあるのではなかろうか。また，価値が誘導されるまでの順序として，初版では交換価値から出発してまず価値，それから，価値そのものの考察において価値の実体の説明となっている。これにたいし，現行版では交換価値から出発してまず価値の実体，それから，価値の説明となっている。これは単なる説明の順序であるが，その説明の順序として，むしろ初版における順序の説明のほうが客観的な抽象の過程により適合的であり，より説得力を増しうると考えられないであろうか。『資本論』現行版で，使用価値の捨象を通してまず価値を，ついで価値の社会的実体としての抽象的人間労働を説くならば，現行版としてもより説得力をますと考えられないであろうか……等々，要するに，こうした説明法については，いちがいに現行版におけるほうがよりすぐれていると断定できないとおもわれるのである。」[2)]

……◇……

名著『イギリスの労働者階級』（東洋経済新報社刊，1975年）をのこされた内藤則邦教授のさらなるご加餐とご精進とをねがい，拙論をもって枯木の山のにぎわいとするものである。

1．商品論とその課題

『資本論』は商品の分析をもってはじまる。

資本主義経済は商品経済を基礎としてなりたっており，資本主義経済のしくみをあきらかにするためには，そのまえに商品経済のしくみをあきらかにしなければならない。そして，商品経済のしくみの解明は，その構成単位となっている個々の商品関係を分析することからはじめなければならない。

商品は労働生産物が資本主義社会でとるところの，もっとも簡単な，もっとも基礎的な，もっとも一般的な経済的形態である。

商品の分析は，労働生産物が商品として――現にわれわれのまえにも――あらわれている形態の分析によっておこなわれる。分析の対象とされる商品は，客観的に現存するものなのであり，頭のなかで考えだされたようなものではない。考えようによっては，どうとでもなるよう

2）大木啓次「価値の誘導について」『立教経済学研究』第18巻3号所載，174～175頁。

なものではない。

マルクス自身も，『資本論』のはじめの商品論を解説しながらつぎのように書いている。

「私が出発点とするものは，いまの社会で労働生産物がとるもっとも簡単な社会的形態であり，そしてこれが“商品”である。それを私は分析するのであり，しかもまず第一にそれがあらわれる形態においてである。」[3)]

『資本論』のはじめにとりあげられる商品はただの商品であり，労働生産物が商品であるというだけの社会的形態をとりあげている。労働生産物の商品という社会的形態とはどんなものであるのかが考察される。そして，商品という社会的形態がになっている社会関係，つまり，商品をして商品たらしめるだけの社会関係をになった単なる商品が分析の対象とされる。

『資本論』のはじめにとりあげられている商品は，資本主義社会が歴史に登場するまえに存在したようなものではない。資本主義経済が支配的におこなわれるようになっている社会――マルクスのまえにも現実にあった社会――の商品である。それは資本主義経済の商品である。資本主義社会に生きていた唯物論者マルクスが，資本主義社会の経済的運動法則をあきらかにすることを目的とした『資本論』で，ことさらに資本主義社会が成立する以前の商品から出発しなければならない理由はない。『資本論』がそのはじめのところでとりあげる商品は，当然のことながら，資本主義経済の商品にほかならない。

しかし，それにもかかわらず，資本主義経済特有の諸関係が捨象された商品，商品をして商品たらしめる社会関係のみをになった商品。そのような意味で単純なる商品なのである。

それでは，資本主義経済特有の諸関係が捨象されるということは，どのようなことなのであろうか。

いうまでもなく，資本主義経済特有の諸関係のうち基本的なものは剰余価値関係にほかならない。剰余価値関係を商品の価値に即していえば，商品価値が不変資本からの移転部分（c）とあらたにつくりだされた価値とに，そして，このあらたにつくりだされた価値，すなわち価値生産物はさらに労働力の価値の塡補分（v）と剰余価値（m）とに分割される関係ということである。すなわち，資本主義経済特有の諸関係を捨象された商品とは，基本的には，その価値がただ労働によって，さらにいうならば，ただその商品を生産するために社会的に必要な労働時間によって規定されるだけであり，まだ，c，v，mの各部分に分割されるにいたらない商品ということである[4)]。資本主義的諸関係といえば，それはまさに『資本論』全体系によっ

3）マルクス「アドルフ・ワグナー『経済学教科書』への傍注」（『マルクス・エンゲルス全集』，大月書店，19巻所収）369頁。

なお，この「アドルフ・ワグナー『経済学教科書』への傍注」には，『資本論』のはじめのところの商品分析についての，貴重な，マルクス自身による解説的説明がみられる。

4）久留間鮫造『貨幣論』，大月書店，228～231頁。

なお，同書後篇「マルクスの価値尺度論」のもとになった研究会において，主要な質問者役をつとめた者は筆者である。研究会出席者のなかにはブッツケ本番の者もいたようであったが，主要質問者

て解明されてゆくことが期待されているものであり，『資本論』のはじめのところでは，当然のことながらまだ解明されてはいない。これから解明されてゆくべきものである。なおまだ究明されてはいないが，これからさきに解明されてゆくべきものとして前提されているのである。

マルクスも，『資本論』のはじめのところで分析の対象とされている商品がおかれている条件について，つぎのように書いている。

「“商品”――もっとも簡単な経済的具体物――を分析しなければならないときには，眼前にある分析の対象となんらかかわりのないすべての関連を度外視しなければならない[5]。」

商品が，ただ商品であるためだけに必要な関連のなかでとりあげられ，分析の対象とされなければならない。

それでは，資本主義経済特有の諸関係が捨象された商品というものは，たんなる思惟的抽象の産物であり，現実には存在しないものなのであろうか。考えだされただけのものなのであろうか。

そうではない。いうならば，資本主義経済特有の諸関係が捨象された資本主義経済の商品は現実の存在でもある。じっさい，資本主義社会の商品をとってみても，しるされた生産者の表示でもみないかぎり，それが資本主義的大経営の生産物であるのか，独立個人営業者の生産物であるのかはわからない。商品自体においては，それがどのような生産関係のもとで生産されたものであるのかという事情が消失しており，生産物はたんなる商品でしかありえないのである。つまり，たとえ資本主義的生産関係のもとで生産された商品であっても，その商品がになっている資本主義経済特有の諸関係は客観的にも捨象されているのである。

『資本論』のはじめのところで分析される商品は，使用価値でもあり交換価値（実は価値）でもある統一物としてそれ自身が矛盾をもち，やがて貨幣ともなり資本ともなってゆく，そうした運動の主体となってゆくものである。だがしかし，さしあたり――というのは，『資本論』一巻一章の範囲では――商品は運動のなかにおいてではなく，いわば静止的な状態において，形態そのものとしてとりあげられている。

『資本論』のはじめのところで分析の対象とされている主体（Subjekt）は商品なのであって，それは使用価値でもなければ交換価値でもない。価値でもない。そのばあい，使用価値および交換価値（実は価値）は，主体である商品の二要因であるにすぎない。使用価値や価値は，それ自身が矛盾をもって運動の主体となることがないのである。

マルクス自身も，つぎのように書いている。「……“価値”も“交換価値”も私のばいには

のばあいは，久留間鮫造教授のメモなども事前に精読し，質問要綱等も丹念に作成し，久留間鮫造教授にお渡ししておいたうえでの発言であった。文中，Bと表示してある部がそれであり，以上のようないききつからして，Bのところはほぼ発言どおりである。冒頭のAの発言となっているところは，筆者が書いておいたものを，形をととのえるために，他の出席者に読みあげてもらったものである。

5）前出，マルクス「アドルフ・ワグナー『経済学教科書』への傍注」。370頁。

主体ではなく，商品が主体（Subjekt）である……[6]」

商品経済は商品生産者たちによってつくられている。商品生産者たちは私的所有制度にもとづき，たがいに独立してそれぞれにことなった種類の商品を私的に，無政府的に生産し，自然発生的な社会的分業をおこなっている。それでは，私的生産者である商品生産者たちは，どのようにして商品生産社会を社会としてなりたたせているのであろうか。その商品経済の基本的なしくみの解明こそが，『資本論』のはじめにおかれた商品論の課題にほかならない。

2. 使用価値の面からの商品分析

商品の分析は，労働生産物が商品としてあらわれる形態の分析によっておこなわれる。

商品はまず使用価値であり，使用価値であってはじめて交換価値（価値）をもつことができる。どんなものでも，使用価値であることなしには価値をもつことができない。だから，『資本論』はじめのところの商品分析にあたっては，商品が，まずもっぱら使用価値の面から一面的に考察される。商品が使用価値であること，またその意味が説明されるのである。

商品はまず第一に人間の外にある物，人間のなんらかの欲望をみたす物である。そして，ある物の人間にとっての有用な性質が，その物の使用価値である。およそ商品はかならず使用価値をもっている。あるいは，商品体そのものが使用価値であるともいえる。

商品の使用価値は，労働生産物が生まれながらにしてもっている，ありのままの自然的形態であり，人間が感覚しうる形態である。ある商品の使用価値は，自然物としてのその商品と人間の欲望との関係にほかならない。だから商品は，使用価値としては，現象とは別のかくされた本質というようなものがなく，現象と本質とが異なるというようなことがない。使用価値であるかぎりでの商品の考察にあたっては，さらに経済学的に分析してみなければわからないような，それ自体に特有な問題はないわけである。

商品の使用価値は他人のための使用価値であり，社会的関連のなかにあるのであるが，使用価値自体としては，なんらの社会的関係をあらわすものではない。その点については，マルクス自身もつぎのように説明している。

「社会的欲望の対象であり，したがってまた社会的関連のなかにあるのであるが，にもかかわらず，使用価値はすこしも社会的生産関係を表現しない[7]。」

使用価値であるかぎりでの商品の分析にあたっては，当面の分析対象である商品の使用価値そのものと無関係なすべての関連は捨象しておかなければならないのである。

だから，とりあげられる商品の使用価値がどのようなものであるかというようなことも捨象して考察される。その商品が食料品であるか衣料品であるか，また，生活手段であるか生産手

6）前出，マルクス「アドルフ・ワグナー『経済学教科書』への傍注」，357頁。

7）マルクス『経済学批判』（『マルクス・エンゲルス全集』，大月書店，13巻所収）14頁。

段であるか等の区別も問われないのである。誤解をおそれずにあえていってみれば，使用価値の面からの商品の一面的考察のさいに問題とされる使用価値は，商品の使用価値一般なのである。

こうして，使用価値の面からの商品分析は，ごく簡単な説明ですますことができるのである。

3.　交換価値の面からの商品分析の意義

商品は，他のなんらかの物と交換されうる物である。商品と交換される他の物が貨幣であるばあいが売買であるが，貨幣の形成や売買はもっとさきへいって説明されることである。

他のなんらかの物と交換されうる性質をもっているということは，商品が交換価値をもっているということである。商品はかならず使用価値と交換価値とをもっている。そして，商品経済においては，使用価値――これはいうまでもなくたんなる使用価値などではなく，商品の使用価値――は，交換価値の素材としての，あるいは物体としての担い手である。

ある物が使用価値であるということだけでは，それが商品であるということにはならない。商品でなくとも使用価値をもっている物があるからである。空気は商品ではないが，人間が呼吸するためには不可欠に有用な使用価値をもっている。農民が自家用に生産する野菜も商品ではないが，食料としての使用価値をもっている。ある物が商品であるためには，それが生まれながらにしてもっている使用価値の形態のほかに，そのうえさらに交換価値の形態をもたなければならない。だから，交換価値の素材的な担い手は使用価値であり，使用価値なしには交換価値もありえないのではあるけれども，また，商品はまず第一に使用価値であり，したがって商品の使用価値についての説明が交換価値の面からの商品分析に先行もするのであるが，商品をして商品たらしめるものは使用価値ではなく，交換価値にほかならないのである。こうして，交換価値の面からの分析こそ商品分析をして商品分析たらしめるものなのであり，商品分析といえば，本来，交換価値の面からの商品分析，とりもなおさず交換価値の分析からさらに価値の分析を意味することとなっているのである。

労働生産物のなかでは，ただたがいに独立しておこなわれる私的労働の産物のみが商品となる。

商品生産者たちは，たがいに独立して私的生産をおこなっている。しかし，彼らは自給自足経済をいとなんでいるわけではない。商品生産者たちは，じぶんの種々な欲望の対象物をじぶんの種々な労働によって生産するかわりに，他の商品生産者たちの使用に供することをみこんでなんらか特殊な物を生産し，そしてそれとの交換によって他の商品生産者たちの労働生産物を手に入れ，それらによってじぶんじしんの種々な欲望をみたすのである。たがいに独立して私的生産をおこなっている商品生産者たちは，各自の労働生産物を商品として交換しあうことによって，はじめてたがいに社会関係をむすびあう。商品生産者たちが各自の労働生産物を商品として交換するということは，それぞれの商品を生産するために支出した私的労働を交換し

あうということである。そこでは私的労働と私的労働とが交換関係という社会的関係におかれることによって，商品を生産した私的労働は社会的労働になる。私的労働と私的労働との交換関係を介して，それぞれの私的労働を支出した商品生産者どおしが関係をもつ。私的生産者どおしが社会的関係をもつ。

商品経済では，人と人との関係が生産物と生産物との関係をとおしてむすばれる。だから，人と人との社会関係は，物と物との関係としてあらわれざるをえない。商品交換は，それを介してこそはじめて商品生産者たちの社会関係がなりたつものである。商品交換は，たがいにばらばらで直接にはたがいに独立した私的生産者にほかならないそれぞれの商品生産者たちをむすびつけ，それによって商品生産を社会的生産の一体制としてなりたたせるものなのである。商品の交換価値は，商品の交換関係を物の性質としてあらわしている。だから，商品の交換価値は，商品の交換関係を介してはじめてむすばれている商品生産者どうしの社会関係を，物の性質として対象的な形態であらわしているものにほかならない。こうして，商品の交換価値の分析は，商品の交換関係によってあらわされる商品生産者たちの生産関係の分析なのであり，商品生産を社会的生産の一体制としてなりたたせているものはなにかということを考究するものにほかならないといえるのである。

4．交換価値の面からの商品分析

それではつぎに，『資本論』で，交換価値の面からの商品分析がどのようにおこなわれているかを，あらためてみてみよう。

「交換価値は，まず第一に，ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係すなわち割合として現われるのであって，それは時と所とによってたえず変動する関係である。それゆえ交換価値は，ある偶然的なもので純粋に相対的なものであるようにみえ，したがって，商品に内的な，内在的な交換価値というものは，一つの形容矛盾のようにみえる[8]。」

こうまえおきしたあとマルクスは，ある商品の交換価値があらわされる関係を想定し，それを所与のものとして交換価値の分析にとりかかる。

商品世界では，いろいろな商品がたがいに対立しあい，交換される。ある商品は他のいろいろな商品とさまざまな比率で交換される。

「ある一つの商品，たとえば一クォーターの小麦は，x量の靴墨とか，y量の絹とか，z量の金等々とか，ようするにいろいろにちがった比率で他の諸商品と交換される。だから，小麦はある唯一の交換価値をもっているのではなくて，さまざまな交換価値をもっているのである。しかし，x量の靴墨もy量の絹もz量の金等々も，おなじように一クォーターの小麦の交換価値なのであるから，x量の靴墨やy量の絹やz量の金等々は，たがいにおきかえられうる，ま

8）マルクス『資本論』(『マルクス・エンゲルス全集』，大月書店，23巻所収）1巻，1章，1節。

たはたがいに等しい大きさの諸交換価値でなければならない。それゆえ第一に，おなじ商品の通用する諸交換価値[9]は，あるおなじものをあらわしているということになる。そして[10]第二に，およそ交換価値は，ただそれとは区別されるある内容の表現様式，“現象形態”でしかありえないということになる[11]。」

ここでは，つぎに究明さるべきもの――諸交換価値という「現象形態」によって表現されているところの本質であるもの――が，「あるおなじもの」，「ある内容」としてとらえられている。これらは，所与の例についてみれば，一クォーターの小麦に内在するものであり，いわば，一クォーターの小麦の「内在的な交換価値」にほかならない。しかしながら，一クォーターの小麦に内在するそれがなんであるか，どのようなものであるかはまだ分析されていないものとして位置づけられている。それは，なおひきつづきこんごに究明さるべきものとされている。

多様な諸交換価値によって表現され，しかもそれらの交換価値とは区別される商品のある内容とはなんであるか？　この追究は，その内容が現象する商品交換関係のうちのもっとも簡単な関係，すなわち，二商品の交換関係においてひきつづきおこなわれる。ある商品はさまざまな交換価値をもつことができるけれど，じっさいに交換されうるのは，なんらかの他の一商品とである。

「さらに二つの商品，たとえば小麦と鉄とをとってみよう。それらの交換関係がどうあろうと，この関係は，つねに，あるあたえられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式，たとえば，一クォーターの小麦＝aツェントナーの鉄であらわすことができる。この等式はなにを意味しているのか？　おなじ大きさのある共通なものが二つのちがったもののうちに，すなわち一クォーターの小麦のうちにも，aツェントナーの鉄のうちにもあるということである。だから両者とも，それ自体としては一方でもなければ他方でもないところの，ある第三のものに等しいのである。だから，両者のうちのどちらも，それが交換価値であるかぎり，この第三のものに還元されうるものでなければならないのである。

「……諸商品の諸交換価値は，それらがあるいはより多く，あるいはより少なくあらわしているある共通なものに還元されるのである[12]。」

二つの商品が交換にさいして等しいとされるということは，それあるゆえに両者をたがいに等しいとするもの――質的に共通で量的におなじもの――が両者のなかにある，ということである。

9）ここの「通用する諸交換価値」の原語は Die gültigen Tauschwerte である。『資本論』の各種訳本は，これを「妥当な諸交換価値」と訳出しているが，それは誤解をまねきかねない不適切な訳であろう。ここは，「通用する」とか「一般におこなわれている」とかの意であろう。

10）ここの「そして」の原語はaberである。『資本論』の各種訳本は，これを「しかし」とか「だが」と訳出しているが，それでは意味が通らない。ここは，「そして」とか「それから」の意であろう。

11）～15）マルクス『資本論』（『マルクス，エンゲルス全集』，大月書店，23巻所収）1巻，1章，1節。

だがしかしマルクスは，『資本論』のここのところで，この両者に共通なものが価値であるとのべることはさけている。そしてマルクスは，諸商品の交換価値がいずれもそれに還元される共通なものを追究するため，こんどは，使用価値の捨象についての分析へとすすむのである。

「この共通なものは，商品の幾何学的とか物理学的とか化学的とか，あるいはその他の自然的な属性ではありえない。およそ商品の物体的な属性は，ただそれらが商品を有用にし，したがって使用価値にするかぎりでしか問題にならないのである。ところが他方，諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは，まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは，ある使用価値は，それがただしかるべき割合でそこにありさえすれば，ほかのどの使用価値ともちょうどおなじだけのものとして通用するのである。……

「使用価値としては，諸商品は，なによりもまず，いろいろにことなった質であるが，交換価値としては，諸商品はいろいろにことなった量でしかありえないのであり，したがって，一分子の使用価値もふくんではいないのである[13]。」

諸商品の諸交換価値がそれに還元されるある共通なものが自然的属性ではありえないこと，また，諸商品の交換関係は諸商品の使用価値の捨象によって特徴づけられることは強調されている。しかし，その共通なものが社会的属性にほかならぬことの明示的な説明はおこなわれていない。交換にさいし，二つの商品が，使用価値としてはたがいにことなっているけれども，それにもかかわらずたがいにひとしいとされるゆえんのものが，それら商品の自然的属性あるいは使用価値でありえないのは，むしろ自明のことである。

そこでマルクスは，「諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは，まさに諸商品の使用価値の捨象なのである」としたうえで，交換される二つの商品に共通なものをつきとめるために，両者をたがいにことなった質とするもの，すなわち使用価値の捨象の分析にすすむのである。諸商品の交換関係における使用価値の捨象ということの意味が，たちいって分析されるのである。

「そこで，諸商品体の使用価値を度外視すれば，諸商品体にのこるものは，労働生産物という属性だけである。だがしかし，この労働生産物も，われわれの手もとですでにかえられている。もしわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば，それを使用価値にしている物体的な諸成分や諸形態をも捨象しているのである。それはもはや，机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覚的性状はすべて消しさられている。それはまた，もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性とともに，労働生産物であらわされている労働の有用性は消えさり，したがってまた，これらの労働のいろいろな具体的形態も消えさり，これらの労働はもはやたがいに区別されることなく，すべてのこらず同じ人間的労働に，抽象的人間労働に還元されているのである[14]。」

こうして，交換にさいして等置される諸商品に共通なもの，それがあるゆえに交換にさいして諸商品が等置されるものを価値であると――概念として――把握しないままに，マルクスは，

商品の諸交換価値がそれに還元される共通なものを究明するために，いわゆる使用価値の捨象の分析をおしすすめる。そしてまず，その使用価値の捨象によって，労働生産物という属性だけがのこるとされる。

使用価値の捨象後にそれだけがのこるとされる労働生産物という属性――それはもはや商品の社会的属性いがいのものではありえないであろう。しかしマルクスは，ここにいたってもなお，使用価値の捨象後にのこる労働生産物という属性が社会的属性にほかならぬことを明示的に説明せぬままである。そうしておいてマルクスは，その労働生産物という属性をうみだす労働は，有用性，具体的形態を消失した，たがいに区別されることのない抽象的人間労働であるとするのである。

「さてこんどは，これらの労働生産物にのこっているものを考察してみよう。それらにのこっているものは，おなじまぼろしのような対象性にほかならず，無差別な人間労働の，すなわちその支出の形態にほかかわりのない人間労働力の支出の，ただの凝固物にほかならない。これらのものがあらわしているのは，ただ，その生産に人間労働力が支出されており，人間労働がつみあげられているということだけである。このような，それらに共通な社会的実体の結晶として，これらのものは価値――商品価値なのである[15]。」

交換にさいし等置される諸商品に共通なものは商品価値にほかならないということがわかった。商品の交換価値によってあらわされる諸商品に共通なものは商品価値である。商品の交換価値という現象形態の本質は商品価値なのである。

商品に結晶し，対象化して価値を形成するもの，それは抽象的人間労働である。そしてその抽象的人間労働は，ここにいたってはじめて価値の社会的実体であるとのべられているのである。

諸商品は，それらを生産するさまざまな労働に共通な抽象的人間労働という社会的実体の結晶として価値なのである。（続）

（1989年9月29日）